

ウィニフレッド・ワトソン作  
最所篤子訳

## ミス・ペティグールの素敵な一日

Miss Pettigrew Lives for a Day, by Winifred Watson, Translated by Atsuko Saisho

### 第一章 午前九時十五分 一時十一分

ミス・ペティグールが職業斡旋所のドアを押し開けて入っていったとき、ちょうど時計が九時一五分をうちました。どうせ仕事なんてないに決まってる、とほとんどあきらめていたのですが、今日は所長さんがにこにこ迎えてくれました。

「あら、ミス・ペティグール。今日はお仕事がありそうよ。昨日の夜、ちょうど帰りがけに二つ申し込みがあったの。どこへやったかしら。ああ、これだわ！ ミセス・ヒラリーがメイドを探してて、ミス・ラフォースが子守兼家庭教師ね。逆なんじゃないかって気がするでしょ。でもこの通りなの。きつとみなしごになった姪っ子かなにかを引き取ったんだわよ」

所長は細かいことを書いたメモを手渡しました。

「それじゃ、これね。ミス・ラフォース、オンズロー・マンション五号室。約束は今朝の一〇時びつたりよ。じゅうぶん間に合っわ」

「本当にありがとうございます」とほっとしたあまりに気が遠くなりそうになったミス・ペティグールはか細い声で言いました。住所を書いた紙をしっかりと手に握り締め、「もつ、あきらめかけてましたの。この頃はあたくしのような者に向いた口が少なくて」

「本当にね」と所長のミス・ホルトは言い、ミス・ペティグールがドアを閉めて出て行った後、「これであの人をやっかいばらいできたらいいのだけれど」と心につぶやきました。

道に出たミス・ペティグールは少し身を震わせました。寒くて灰色にけぶった一月の朝です。霧雨が降っています。ミス・ペティグールのコートは野暮ったく、みっともない茶色で、おまけにあまり暖かではありませんでした。五年も前から着つづけているのです。車がびゅんびゅんロンドンの街を走り抜けていきます。人々は、できるだけ早くこの気の滅入る天気から逃げ出そうというふうに、急ぎ足で目的地に向かっていきます。

ミス・ペティグラーもその中に混じって歩き出しました。ミス・ペティグラーは中年の、ちよつとしやちほこばつた感じのする婦人でした。中背で、栄養が足りずに痩せています。よく見よつとすれば、その両目には打ちのめされたような、怯えた色が浮かんでいゝるのですが、この世のどこを探しても、ミス・ペティグラーが生きよつが死のうが、氣にするよつな友達も家族もいないのでした。

ミス・ペティグラーはバス停に行つてバスを待ちました。バス代を払つ余裕なんてないので、遅刻してせつかくの口を失つ余裕はもつとありません。バスを降りると、オンスロー・マンシヨンまで歩いて五分。ミス・ペティグラーが目指す建物の前に立つたのはちよつと一〇時七分前でした。

その建物は、いかにも高級で、いかにも豪華で、おじけづきたくなるほど立派なアパートでした。ミス・ペティグラーは自分のみすばらしい服装が氣になりました。良家の生まれといつても、昔のこと。何週間も、救貧院に入るか入らないかのぎりぎりの生活で、勇氣なんかどこかに消えてしまつています。ミス・ペティグラーは少しの間、立ち止まり、心の中で祈りました。「どつか神様、これまであたくしがあなたの御心を疑つたことがありましたなら、お許しくださいまし。そして今こそお助けくださいまし」そして、今まで心の中でも言葉にしたことがない本音をお祈りに付け足しました。「これが最後のチャンスよ。頼んだわよ、神様。行くわよ、あたくし」

ミス・ペティグラーは中に入つていきました。ホールにいたポーターが物問いたげな目でこちらを見えています。エレベーターを呼ぶベルを押す勇氣もなく、ミス・ペティグラーは大階段を上がり、うろつろと探して五号室を見つめました。ドアの小さなプレートにミス・ラフォースと書かれています。ミス・ペティグラーは母親の形見の腕時計がきつかり一〇時をさすのを待つてから、ベルを鳴らしました。

答えがありません。もう一度ベルを押しました。ちよつと待ち、もう一度。普段はこんなに頑張るほうではないのですが、仕事をもらえなかつたらどつしよつと思つと、やけつぱちの勇氣が出たのです。ベルを何度も鳴らしながら、五分間がたちました。と、突然、ドアがぱたんと開いたかと思つと、そこには若い女性が立つていました。

ミス・ペティグラーは息を呑みました。その女性はあまりにも美しく、ミス・ペティグラーがとつさに映画に出てくる美しい女優たちを思い浮かべたほどです。くるくるとした金髪のかき毛が乱れて顔を取り巻いています。まだ眠そつな目はリンドウの花のよつな青です。若々しい薔薇色に染まつた頬の綺麗なこと。ふわふわしたローブのよつなものを身にまもつています。ただのドレスシング・ガウンなんかじゃありません。映画で有名な大スターたちが男性を誘惑する場面を着るよつなローブです。スクリーンの中の若い女性たちがどんな衣装を着てどんなふう振る舞うか、ミス・ペティグラーはよつく知つていました。

退屈でみじめな毎日のなかで、ミス・ペティグラーの唯一の思いきつた驚沢といつたら、週に一度、映画館でうつとりと過ごす時間でした。二時間ちよつとの間、美女や八

ンサムなヒーローやかっこいい悪党や、それに素敵な雇い主が登場する夢の世界の住人になるのです。そこには朝から晩までミス・ペティグルーをからかったり、いじめたり、脅かしたり、追いつたりする意地悪な親たちも、手に負えない子供たちもいないのでした。現実には、シルクやサテンやレースで飾ったネグリジエを着て朝食の席につく女性など一度も見たことはありません。でも映画ではみんな着ています。そうした美しい幻の一つが人間の形になって現れるなんて、ミス・ペティグルーは自分の目を疑いそうになりました。

でも、ミス・ペティグルーは一目でその女性が何かに怯えていることを見て取りました。ドアを開けたときの若い女性の顔は不安げにこわばっていて、ミス・ペティグルーを見たとき、ほっとしてぱっと明るくなったからです。

「お邪魔いたしました……」ミス・ペティグルーはおどおどと口を開きました。

「今、何時かしら？」

「はじめにベルをお鳴らししたのは一〇時ぴったりでしたの。ご指定のお時間ですわ、ミス……ミス・ラフォース？ 五分間ほどずっと鳴らし続けてましたの。今、一〇時五分ですわ」

「まあたいへん！」

びっくりしているミス・ペティグルーを尻目に、ミス・ラフォースは身を翻すと部屋に引っ込んでしまいました。お入り、とは言われませんでした。が、良家の子女としては、一文無しになるなんて、人生最大の危機です。ミス・ペティグルーは勇気を振り絞り、中に足を踏み入れると、扉を閉めました。



島田圭子画

「とにかく、面接だけはしていただかなくっちゃ」とミス・ペティグルーは考えました。ふわふわしたローブの裾が次のドアの向こうに消えたかと思うと、せきたてるような声が聞こえてきます。

「フィル。フィル、ねぼすけね。さ、起きて。一〇時半よ」

「誇張する傾向あり」とミス・ペティグルー。「子供にはいいお手本ではないわ」

ようやく落ち着いてあたりを見回すと、そこには目の覚めるような色合いのクッションがのっかった、いつそ目の覚めるような椅子や革張りのソファが置かれています。床にはふかふかした、珍妙な柄のベルベットのカーペット。驚くほど豪華なカーテンが窓にかかっています。壁にかかっている絵は……じよ、上品とはいいがたいけれど、ミス・ペティグルーは思いました。色とりどりのさまざまな飾り物がマントルピースやテーブルやランプスタンドを飾っています。こんな部屋、見たこともありません。何もかもが息をのむようなエキゾチックな輝きに満ちています。

「淑女の部屋ではないわ」とミス・ペティグルーは思いました。「亡くなった母だったら顔をしかめたたぐいの部屋だわ。でも……でもそつね、確かにさっきのあの綺麗な方にはびつたりだわ。急にどこに消えちゃったのかしら」

ミス・ペティグルーは渋い顔をして、とがめるようなまなざしであたりを見回しました。でも、そのしかめ面の下で、不思議なわくわくした気持ちが湧き上がってきます。こつこつ部屋でこそ、人々がいろんな面白いことをして、へんてこな事件がもちあがるのだわ。さつきちらつとミス・ペティグルーに声をかけたような、素晴らしい人たちがどきどきはらはら、胸の躍るような毎日を送っているのです。

そんな軽はずみな考えが心に浮かんだことにびっくりしたミス・ペティグルーは、空想の手綱をしっかりと引き締めて、無理やり現実的なことに思いをめぐらせました。

「問題は子供たちよ」とミス・ペティグルーは思索しました。「こんなとんでもない部屋のどこで子供を教えたり、遊ばせたりしたらいいのかしら？ インクやら汚いしみやら、あのクッションにつきでもしたらたいへん」

寝室らしき部屋のドアの向こうから、さつきから言い争う声が聞こえてきます。低く、快い響きの男の声が不平を言っています。

「ベッドに戻れよ」

すると、ミス・ラフォースの甲高い声が一生懸命に説得します。

「だめよ。あなたが眠くたってあたしのせいじゃないわ。あたしはもう目が覚めたし、今朝はすることがいっぱいあるの。午前中、ずっとそこでいびきをかいてもらっちゃこまるのよ。だってこの部屋、片付けさせたいんですもの」

すぐにドアが開き、ミス・ラフォースが出てきました。そのすぐ後ろを男がくっついてきています。男は目の覚めるような色合いのシルクのドレッシング・ガウンを着いて、ミス・ペティグルーは目をぱちくりしました。

震える手でしっかりとハンドバッグを握り締めながらそこに立ちつくし、ミス・ペテ

イグルーは、いったいどこでなにをしているんだと冷たく聞かれるのを待っていました。緊張と恐怖で身体ががっくと熱くなり、ほんのりと汗ばんできます。面接となると、ミス・ペティグルーはてんで駄目でした。雇い主との丁々発止がはじまりもしないうちから急に恐ろしくなり、もつだめだわ、絶望的だわ、と思ってしまうのです。こんな人たちが……いえ、どんな雇い主だって……あたしに仕事をくれてお金を払ってくれるなんてこと金輪際、ありっこないのよ。ミス・ペティグルーはできるだけ威厳を保ち、気を落ち着かせて、でもどきどきしながら「出て行け」と言われるのを待ちました。

若い男は、ちつとも驚いたふうもなく、ミス・ペティグルーに愛想の良い顔を向けました。

「おはよう」

「おはようございます」とミス・ペティグルーは言いました。

ミス・ペティグルーはどつと力が抜けて、椅子にどしんと座り込んでしまいました。

「あんたも寢床から引つ張り出されたの？」

「いいえ」とミス・ペティグルーは言いました。

「本当かい？ まだ起きてちゃんと服を着るような時間じゃないよ、ねっ」

「一〇時一三分ですわ」とミス・ペティグルーは厳しい声で言いました。

「一晩、寝てないんだよ。ここずっと夜通しのパーティーなんて我ながらびっくりだ。僕は寝るのが好きなんだ。寝ないと一日、ぼーっとしちゃって」

「あたくしは一晩、起きておりませんでした」とミス・ペティグルーはうるたえながら言いました。

「だから、女性つてのは尊敬に値するんだ」

ミス・ペティグルーは返事をするのをあきらめました。こんな洒落たやりとりはとても手に負えません。ミス・ペティグルーは青年をつくづくと眺めました。彼はこざっぱりして、快活で、きらきらする濡れたような茶色の瞳と黒い髪をしていました。鼻がおそろしく高く、豊かな唇をしています。抜け目のない顔つきですが、相手が愛想よくするならこちらも愛想よくするのにやぶさかではないといったふうです。

「それに、そうね」とミス・ペティグルーは思いました。「きっと先祖にユダヤ人がいるって顔よ、間違いないわ」

彼は誰にともなく話しかけるように言いました。

「君は急いでて、オレンジ・ジューズでいいかもしれないけど、僕はいやだな。腹が減ったよ。朝めしが食べたい」

「朝ごはんですって？」とミス・ラフォースが息をのみました。「朝ごはんなんて！ メイドが辞めたの知ってるでしょ？ あたし料理はできないの。ゆで卵のほか何にもつくれないわ」

「ゆで卵なんて大嫌いだ」

ミス・ラフォースの目が泳いでミス・ペティグルーをとらえました。すがるようなま

なぞしで尋ねます。

「あなたお料理できる？」

ミス・ペティグルーはすつくと立ち上がりました。

「子供の頃」とミス・ペティグルーは言いました。「家庭料理の腕にかけては、母をのぞけば、あたくしの右に出る者はないと父は申したものです」

ミス・ラフォースの顔が嬉しそうにぱつと輝きました。

「そうだと思ったの。あなたのお顔を見たたん、頼れそうな方だとびんときたのよ。あたしはだめ。あたしはほんと役立たずなの。キッチンはそのドアよ。なんでもそろつてるわ。でも急いでね。お願いよ」

おだてられて舞い上がったミス・ペティグルーは面食らいながらもつきつきとドアを開けました。自分が頼れる相手なんかじゃないことはよく知っています。でも、ことによるとそれはこれまで誰もかれもが、ミス・ペティグルーを役立たずだと思いこんできたせいではないでしょうか。人間、どんな隠れた才能を持っているか分からないものです。顎をあげ、目を輝かせ、胸をときめかして、ミス・ペティグルーはキッチンに入りました。後ろではミス・ラフォースの声が続いています。

「さ、早く髭をそつて服を着て、フィル。身支度ができたら朝ごはんもできてるわ。あたしはテーブルの準備しなくちゃ」

ミス・ペティグルーはキッチンの中を見回していました。何もかも最新式です。タイル張りの壁、冷蔵庫、電気オーブン、あふれんばかりに詰め込まれた食品棚。でも「まあまあ、なんてぐちゃぐちゃなの」とミス・ペティグルーは思いました。「それに、不潔だし。このキッチンを使っていたのは誰だか知らないけど……とにかく、だらしのない女ですよ」

コートと帽子をとると、ミス・ペティグルーは働き始めました。すぐにハムと卵が焼け、コーヒーが沸く幸せな香りが漂いはじめました。電気トースターを発見すると、トーストもお盆に載りました。ミス・ペティグルーは部屋に戻り、「ご用意できましたわ、ミス・ラフォース」

ミス・ラフォースは輝くような感謝の微笑みを浮かべました。髪にブラシをあて、唇に紅をさし、うつすらとおしろいをはいた顔が華やかに見えます。まだゴージャスなシルクのネグリジエを着たままの姿は息をのむほど美しく、ミス・ペティグルーが「フイルさんがベッドに戻ってこいと言つのも無理ないわ」と思ったほどでした。そのとたん、身の置きどころがないほど恥ずかしくなって顔が真っ赤になりました。慎み深いミス・ペティグルーの心にそんなはしたない考えがよぎるなんて！ それから……しばらくたってミス・ペティグルーは思いあたりました。「ミス・ラフォースですつて。ミスだなんて、そんな、おかしいわ」

「あらあら」とミス・ラフォースは心配そうに言いました。「真っ赤になってしまつて。」

熱いストーブの上でお料理したからよ。だからあたし、これまでお料理したことないの。顔色がめっちゃめっちゃになってしまっんですもの。本当にごめんなさいね」

「お気になさらず」とミス・ペティグルーはあきらめをにじませながら言いました。「もうこの年齢になりましたら……顔色なんてどうでもいいんです」

「どうでもいいですって！」とショックを受けたミス・ラフォースは言いました。「顔色はいくつになっただって大事だわ」

フィルが部屋に帰ってきました。すっかり身支度を整え、ぴかぴかする石のはまった指輪をたくさんつけています。ミス・ペティグルーはこっそりと頭を振りました。

「いい趣味ではないわ。紳士ならあんなにたくさん指輪ははめないわ」

「うーん」とフィルが声を出しました。「鼻が朝めしの匂いをかぎつけたぞ。それに胃袋がまだかまだかつて催促してる。さすがだね」

ミス・ペティグルーは嬉しそうに微笑みました。

「ご満足いくとよろしいのですけれど」

「もちろんだよ。このお嬢さんは美しいの役立たずだからね。役に立つ友達を持っててくれて助かった」

彼は感じのよい笑顔を浮かべました。その瞬間、ふいに、ミス・ペティグルーは不敵な考えが起こったのです。「あたくし、この人が気に入ったわ」

「気に入ってるのよ」とショックを受けているもう一人の自分に断固として言い聞かせました。「いいじゃないの。気に入ったんだから。この人はあまり……あまり繊細とはいえないわ。でもいい人よ。あたくしがみすばらしくて貧乏なことなんか気にしないし。レディだって、この人なりに気を遣ってくれているし」

それはフィルがこれまで会ったことのあるどんな男性とも違っていたからかもしれない。フィルは紳士ではありませんでした。これまでずっと、ミス・ペティグルーの男性をはかるものさしになるのは上品でよそよそしい礼儀正さでした。でも彼が朗らかで感じのよい態度に、そんなものよりもずっとあたたかで幸せな気分になり、自信がわいてきたのです。そこへミス・ラフォースが声をかけました。

「あなたの席はここよ。もう朝ごはんを上がったかもしれないけど、せっかくのおいしいコーヒーを飲まないのはもったいないわ」

「まあ！」とミス・ペティグルーは感動しました。「なんて……なんてご親切なんですよ」

ミス・ペティグルーは急に泣きたくなりましたが、泣くことはしませんでした。びっくりしたことに、しっかりと頭を上げると、おごそかにこう言いました。

「お二人ともおかけくださいませ。あたくしお給仕いたしますわ。もうご用意できてますから」

フィルは朝食を大喜びで食べました。ゆっくりと時間をかけて、グレープフルーツにハムと卵、マーマレードを塗ったトースト、それにフルーツを平らげると、ゆったりと

椅子にもたれ、ポケットから、いかにもワルっぽい両切りの葉巻タバコの包みを取り出しました。

「ちくしょう、失敬」と彼はミス・ペティグルーに謝りました。「あなたにすすめたいところだけど、紙巻のやつを持ってないんだ。いつも入れるつもりで忘れちゃったよ」「ミス・ペティグルーは椅子に座ったまま、胸をときめかせ、嬉しさに顔をほんのりピンク色に染めました。男性があたくしをタバコのみだと思うなんて、あたくしも思っているほど年寄りくさく見えなくていいことかしら。

「そんな嫌らしいもの、吸わないでくれたらいいのに」とミス・ラフォースが文句を言いました。「嫌なこおい」

「癖になっちゃって」とフィルは申し訳なさそうに言いました。「普通の葉巻が買えなかったときに始めたんだけど、今じゃ、普通の葉巻じゃだめなのさ」

「しょうがないわね。たて食うものも好き好き」とミス・ラフォースは哲学者のような顔をして言いました。

ところで、さつきからミス・ペティグルーは持ち前の細やかな女らしい観察力で、この女主人が微笑みを浮かべた下で、ひどく張りつめていることに気づいていました。つと、ミス・ラフォースは立ち上がったって、キッチンの方に行きました。

「もう少しコーヒーがほしいわ」

ミス・ペティグルーはその背中を目で追いかけてました。ミス・ラフォースは戸口で立ち止まると、一生懸命にこつちに来るよう合図しています。ミス・ペティグルーは生まれてから一度も芝居をしたことはありませんが、このとき、素晴らしい名演技を披露しました。立ち上がると、やれやれ、というようないかにもこの場にふさわしい笑いを含んだ声で言ったのです。

「あたくしが行ったほうがよさそうですね。あの方、きつとご自分にコーヒーを注いでしまうのが関の山ですもの」

キッチンに入ると、ミス・ラフォースが必死の面持ちでミス・ペティグルーの腕を握りしめました。

「お願い、彼を出て行かせてちょうだい。ああ神様、どうしたらいいの！　ね、今すぐあの人を追い出して。あなたなら彼に疑われずにやれるわ。あなたなら何でもできるわ。どうか、お願いだからあの人を出て行かせて」

困り果てたミス・ラフォースは両手をもみしだき、動転したあまり愛らしい顔は紙のように真っ白です。ドラマです！　キッチンは心臓のどきどきにあわせて脈打ちはじめました。ミス・ラフォースの頼みをはねつけられる人はだれもいないでしょう。もちろん、感じやすいミス・ペティグルーが勝てるわけがありません。ミス・ペティグルーはいったいなにがなんだか、さっぱりわけが分かりませんが、気の毒に思い、心から同情しました。ただし、同情のかけで、ちょっと後ろめたくなりながら、これまで経験したことのない興奮に胸を躍らせないわけにいきませんでした。「これが」とミス・

ペティグルーは心の中で言いました。「これが人生というものなのだわ。あたくしが一度も知らなかった人生なのよ」

でも、ミス・ラフォースはかわいそうがうってもらっただけでは不十分でした。この愛らしいお嬢さんは行動を求めているのです。ミス・ペティグルーはこれまでこんな微妙な手腕が必要な事態に直面したことは一度もありませんでした。いったいどうしたらいいのでしょうか？ ミス・ペティグルーは心の中でこれまでの人生を大急ぎでさらってみました。どの経験が役に立つでしょうか？ そういえば、ゴールドアース・グリーンが紹介してくれたミセス・モートルマン。あの人の旦那さんは本当にひどい男だったけれど、あの人はとてもうまくあしらっていたわ。ああもし……ミス・ペティグルーは突然、びっくりするような力強い自信が全身にみなぎるのを感じました。この可愛らしい娘さんはミス・ペティグルーを信じているのです。この人をがっかりさせるわけにはいきません。このミス・ペティグルーも、ミセス・モートルマンになれるでしょうか？

「あたくし、これまで一度だって人様を傷つける嘘をついたことはありませんし」とミス・ペティグルーは言いました。「罪のない嘘をついたのだってほとんどありませんわ。でも何だつてやってみなきゃならないときってくるものね」

「フィルにあなたが出て行ってほしいって思ってることを悟られないでね。ぜったい、おくびにも出さないで」

「そんなこと夢にも思いませんとも」

ミス・ラフォースはミス・ペティグルーに両腕を回すと、キスしました。

「ああ、思った通り！　なんてお礼を言ったらいいのかしら。本当にありがとつ、感謝するわ……ほんとうに大丈夫ね？」

「おまかせくださいな」とミス・ペティグルーは言いました。

ミス・ラフォースはドアに向かいました。落ち着きはらって、自信に満ちあふれたミス・ペティグルーはやさしくうなりました。

「コーヒーをお忘れですよ」

ミス・ペティグルーはコーヒーポットにコーヒーを注ぐと、くるりと向きを変えて部屋に戻りました。心臓はどきどき、頬はかっかとして、緊張でくらくらしましたが、これまでの人生でこんなに胸が踊ったことはありません。次から次へといろんなことが起こっています。ミス・ラフォースが怯えたように後ろにつけてきました。

ミス・ペティグルーは腰掛けると、自分とミス・ラフォースのためにコーヒーを注ぎ、二、三分のあいだ黙っていました。絶妙な間のとり方です。さっきの不思議な自信はまだ消えさせてはいません。フィルはすっかりくつろいでいるようです。とうとうミス・ペティグルーは口を開きました。上品で魅力的な微笑みを浮かべて身を乗り出すと、「あなた、あたくしはお仕事があるんですよ。ミス・ラフォースとお話することがたくさんありますの。あたくしたちを二人きりにしてくださいってお願いしたらお腹立ちになるかしら？」

「なにを話すって？」

ミス・ペティグルーは引き下がりません。

「ああ！」とミス・ペティグルーはやっぱりと控えめにいいました。「いろんなものですよ……レディの衣装のうちのあるものとか……」

「それなら大丈夫。僕は何でも知ってるからね」

「知識としてはね」とミス・ペティグルーは重々しく言いました。「でも実践となると……」

「……」ご存知でないことを祈るわ。だって試着をするんですのよ」

「ぜひ学んでみたいけど」

「ご冗談を」とミス・ペティグルーは顔をしかめました。

「分かったよ」とフィルは降参しました。「じゃあ、寝室で待ってるよ」

ミス・ペティグルーは少し面白がっているような顔で首を横に振りました。

「そうなさりたいのなら……でも寝室で一時間以上も凍えながら座ってらっしゃるの？」

「そんなに長く下着のことばかり話しているのかい？」

「ほかにも女同士の話がございますの」

「聞いてちゃだめ？」

「いけません」とミス・ペティグルーは厳しい声で言いました。

「なんで？ あまりにもはしたなくて僕の耳に入れられないとか？」

ミス・ペティグルーは立ち上がると、息を吸い込んで胸をはりました。

「あたくしは」とミス・ペティグルーは言いました。「牧師の娘ですことよ」

フィルはおとなしくなりました。

「分かったよ、ハニー。あんたの勝ちだ。さつさと退散するよ」

「まあ、嫌らしい」とミス・ペティグルーは苦笑しく思いました。「安っぽいアメリカ映画の影響ね」

ミス・ペティグルーはフィルにコートを着せてやりました。このやり取りの間、ずっと、ミス・ラフォースはそ知らぬ顔でフィルが出て行くのが残ろうがどっちでもいいというそぶりでした。でも中年のご婦人というのは機嫌をとったほうがいいに決まっています。ミス・ラフォースはミス・ペティグルーの言うことを聞きなさい、というようにフィルに片目をつぶってみせました。それに気がつく、今やすっかり世慣れた女性に変身したミス・ペティグルーは、たくらみにアクセントが加わって、すっかり悦にりました。

「それじゃ、さよなら、ベイビー」とフィルは言いました。「またそのうちにね」

彼はミス・ラフォースを腕に抱くと、キスをしました。ミス・ペティグルーが見ているようがいまいが気にもとめていないようです。それに、もちろん彼は気にするどころではありませんでした。ミス・ペティグルーはへたへたと椅子に座りました。

「まあ、どうしましょー！」ミス・ペティグルーの清く正しい理性は、この事態にあたふ

たためまぐるしく働きました。「キス……あたくしの目の前で。あんな……あんな情熱的な。あるまじきことよ」

でも、ミス・ペティグルーだって女です。気まぐれな心臓は、胸の中でどきどきと高鳴り、ミス・ラフォースの顔に浮かんだ幸せ一杯の表情にすっかり嬉しくなってしまうたのでした。おまけに、何度も交わしたミス・ラフォースとの熱烈なキスのおかげでいくぶんぼんやりしていたとはいえ、フィルはとて礼儀正しく、ミス・ペティグルーにさよならを言うのを忘れませんでした。

ミス・ラフォースに最後のキスをし、ミス・ペティグルーに最後の言葉を残して、フィルはドアを開けて出て行きました。